



# 大原遺跡

埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

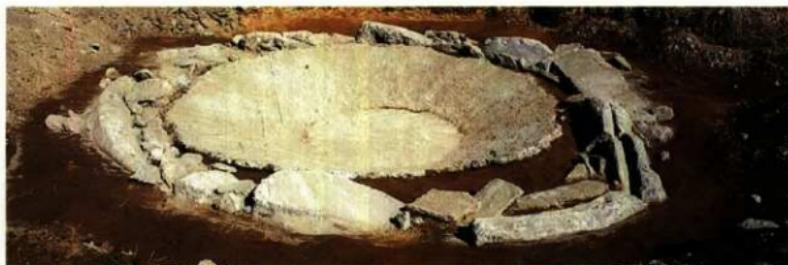
—上の原保育所(仮称)の整備事業—

2003

伊那市教育委員会  
伊那市土地開発公社  
伊那市福祉事務所



廃絶時ままの防火用貯水槽（南側より眺む）



掘り上がった防火用貯水槽（南側より眺む）



防火用貯水槽の組み方



防火用貯水槽の壁面細部

## 序

今回の発掘調査対象地となった上の原区一帯は、住宅建設の波が急激化し、伊那市内でも一大住宅地域として目ざましい発展を遂げている現状であります。この地域での家族構成は若い人達が大勢を占めており、結果的には幼児数が急増している実態であります。このことが直接的な発端となりまして、保育所建設運動が活発に展開され、上の原公民館の道を隔てたすぐ西側に、名称は仮称でありますが、「上の原保育所」建設が具体的な運びとなりました。

建設予定地は近頃、太平洋戦争時の戦争遺跡として有名になり、出版物を通して大々的に紹介されている「旧陸軍伊那飛行場跡地」との事由で、建設工事着工以前に、緊急発掘調査を実施することになりました。

発掘調査の結果、伊那市内では二例目の戦争時に使用された遺構（防火用貯水槽1基、竪穴2基）と、当時、使用された生活用品類が検出され、語り草になってはいたが、実際には空白部分の多かった一時期が徐々にではあるが、明らかになりました。

報告書の刊行に当たって、この発掘調査実施に深いご理解、ご指導をいただきました長野県教育委員会、伊那市土地開発公社、伊那市福祉事務所、直接的に精励された御子柴泰正発掘調査団長を始めとする発掘調査団各位、作業員各位、地権者各位に対し、深甚なる謝意を表する次第であります。

平成15年2月13日

伊那市教育委員会

教育長 保 科 恭 治

## 例　　言

1. 本書は、上の原保育所（仮称）の整備事業に伴う埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書である。
2. この緊急発掘調査は伊那市土地開発公社理事長の委託により、伊那市教育委員会が市内遺跡発掘調査団（大原遺跡）を編成し、それに事業を委託して実施した。
3. 本調査は、平成14年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

飯塚政美 本田秀明

○図版作製者

- ・地形及び遺構実測図 本田秀明 飯塚政美
- ・石器実測図 本田秀明
- ・遺物拓影 本田秀明
- ・金属製品実測図 本田秀明
- ・その他特殊遺物実測図 本田秀明

○写真撮影者

- ・発掘及び遺構 飯塚政美
- ・遺物 飯塚政美

5. 本報告書の編集は主として伊那市教育委員会がおこなった。

6. 出土遺物、遺構図面及び遺物実測図面類は伊那市考古資料館に保管してある。

# 目 次

## 口 統

序

例 言

目 次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章 環 境.....	5
第1節 位 置.....	5
第2節 地形・地質 .....	5
第3節 歴史的環境.....	6
第Ⅱ章 発掘調査の経過.....	9
第1節 発掘調査に至るまでの経過.....	9
第2節 発掘調査の組織 .....	9
第3節 発掘調査日誌.....	10
第Ⅲ章 発掘調査.....	13
第1節 調査の概要.....	13
第2節 造構と遺物 .....	14
(1) 縄文時代の遺物 .....	17
(2) トレンチ内出土遺物 .....	17
第Ⅳ章 所 見 .....	25

## 挿 図 目 次

第1図 位置及び遺跡分布図 .....	7
第2図 地形及び造構配置図 .....	13
第3図 防火用貯水槽実測図 .....	14
第4図 防火用貯水槽内出土遺物実測図 .....	15
第5図 第1号竪穴実測図 .....	16
第6図 第2号竪穴実測図 .....	16
第7図 石器実測図 .....	17
第8図 磁器・ボマード瓶実測図 .....	18
第9図 鉄製大型杓文字実測図 .....	19
第10図 鉄製プロペラ状工具実測図 .....	19
第11図 各種の金属器類実測図 .....	21
第12図 ガラス瓶類実測図 .....	22
第13図 電気関連器具類実測図 .....	23
第14図 革製品類実測図 .....	24
第15図 旧陸軍伊那飛行場復元図 .....	25

## 図 版 目 次

図版 1 遺跡遠景	26
図版 2 発掘調査状況	26
図版 3 発掘調査状況	26
図版 4 発掘調査状況	26
図版 5 発掘調査状況及び造構	26
図版 6 造 構	26
図版 7 造 構	26
図版 8 出土遺物	26
図版 9 出土遺物	26

# 第Ⅰ章 環 境

## 第1節 位 置

大原遺跡は、長野県伊那市大字伊那部上の原集落の中心部付近一帯に所在している。遺跡地に至るまでの道順として二通りが考えられる。第一に、天竜川に沿って南北に走る主要地方道伊那・辰野線（通称竜東線）を箕輪町へ向って北上し、上牧集落の入口付近で信号機の設置された四叉路にぶつかる。この交差点を右折し、段丘を登りつめて、平坦部に至ると市営住宅、県営住宅、さらに、近年、住宅化が顕著になった美原団地の家並みが密着はじめてくる。段丘を登り切った最初の四叉路に信号機があり、ここで右折して南へ100m程行くと、右手に藤原商店・高山商店がある。この地点で西へ右折し、500m程直進すると段丘突端面に達する。このところを左折して、1000m程南進すると左手に赤羽電具製作所の大きな建物が、それに隣接して上の原公民館が最初に目に入る。それらから道を隔てた西側一体が大原遺跡である。

もう一方の道順は伊那市街より高速線を東へ800m程行くと、左手に伊那公園に至る坂道があり、これを登り切り、進路を東に向けると伊那東部中学校校舎が眼の前にせまってくる。この地点を左折して、なだらかな坂道を通って、北進すると、信越放送伊那放送局の高いアンテナが右手に一段と目立ち、さらに北に向かって直進すると右手に前述した赤羽電具製作所の大きな建物が目に飛び込んでくる。赤羽電具製作所と上の原公民館は隣同志である。

## 第2節 地形・地質

伊那谷は南北に走る二つの大きな山脈（西側は木曾山脈（別称中央アルプス）、東側は赤石山脈（別称南アルプス）に挟まれ、縱谷状地形の最低部に天竜川が東西の多くの支流を合わせて北から南へと延々、二百数kmを流れ、太平洋へと注ぎ込んでいる。

遺跡地のある台地は六道原段丘と呼ばれている。これについては『上伊那誌自然篇』には次のように記されている。「現河床から20m～30mの高さをもつ、六道原礫層の堆積面で、小坂田ロームと波田ロームとが風成で乗ってくるが、小坂田ロームと波田ロームに覆われている堆積段丘である。」ローム層は現在はテフラ層と呼ばれており、小坂田ロームは現在は新規テフラ、波田ロームは中期テフラにそれぞれ該当する。

新期テフラの産状は最上位に位置し、周辺山麓より低い最も広大な扇状地面（高位堆積面）の上にある。この場合、竜西段丘面の一つである大泉面、竜東段丘面の一つである卯ノ木面においても、このテフラ層の直下は整合となっている。

中期テフラの産状は、大泉面、卯ノ木面上でわずかに重なりを持っているが、一般的に低地

帶部では水成相を、高地帶部では風成相をそれぞれ成しているが、場合によっては多少の水の影響を受けている。一方、手良面、荒神山面、六道原面は全部が風成である。下部の古期テフラ層の風化帯には第一浮石層が見られ、これは多くの水の影響を受けて白く変色しているので「白土」と呼ばれている。

白土とは、火山噴出物（テフラ）の浮石、つまり、軽石が風化し、粘土化したものであり、その組成時期は10万年位前と考えられている。本遺跡地のある六道原台地は良質な白土を産するとのことで有名である。白土は陶器の原料や、セメントの材料にするほか製紙、製薬、化粧品、歯磨粉など広い用途を持っている。

本章第1節の位置の項で述べたように遺跡地までに至る道順で伊那東部中学校があげられている。この学校の北寄りに三峰川右岸第二河岸段丘崖面があり、ここに見事なテフラ層の堆積が見られ、「南信州型テフラ層柱状」の模範例として全国の地質研究者達の間に知れわたっている。以上、述べてきたようなところに大原遺跡は存在している。大原遺跡周辺の微地形は現在は水田化されてはいるが、ところどころに小さな起伏が見られ、かつては小さな沢が浸食していた事実が理解できる。なかでも、この遺跡の北側は美篤笠原に源を発する「土王田川」が大きく流れ込んだ凹地があり、これをを利用して、現在は農免道路が開通している。（本田秀明）

### 第3節 歴史的環境

大原遺跡周辺一帯に点在している遺跡を天竜川を中心にして竜西、竜東両地区から抽出し、その遺跡の時代的な位置づけを記すことにする。まず、大原遺跡から、次に竜西地区から見てみよう。

①大原遺跡は縄文中期、太平洋戦争遺跡（旧陸軍伊那飛行場跡）。②大清水遺跡は縄文中期。③清水洞遺跡は縄文早・中・後・晚期、弥生後期、古墳時代土師器、須恵器、平安時代須恵器。④宮の前遺跡は旧石器、縄文中期、弥生後期、古墳時代須恵器、平安時代土師器、須恵器。⑤御園東部遺跡は縄文中期、平安時代土師器、須恵器、灰釉陶器。⑥御園南部遺跡は縄文中期。⑦石塚遺跡は縄文中期、平安時代土師器、須恵器、灰釉陶器。⑧今泉遺跡は縄文早・前・中・後・晚期、平安時代土師器、須恵器。⑨原垣外遺跡は縄文中期、平安時代土師器、須恵器、灰釉陶器。⑩鳥居原遺跡は縄文中期、古墳時代須恵器、平安時代土師器、須恵器、灰釉陶器。⑪高尾遺跡は縄文早・前・中期。⑫牧ヶ原遺跡は旧石器、縄文草創期、縄文中期、弥生後期である。

次に天竜川を挟んだ東側、いわゆる竜東地区を見てみよう。⑬大久保遺跡は平安時代灰釉陶器。⑭野底古墳群（13基の円墳を有する群集墳）。⑮上牧古墳群（13基の円墳を有する群集墳）。⑯長者屋敷遺跡は縄文中期、弥生中・後期、平安時代土師器、須恵器、灰釉陶器。⑰芝垣外遺跡は弥生後期、古墳時代土師器、須恵器、奈良時代土師器、須恵器、平安時代土師器、須恵器、



第1図 位置及び遺跡分布図 (1 : 50,000)

#### 遺跡の名称

- |        |      |      |        |       |          |        |
|--------|------|------|--------|-------|----------|--------|
| ①大原    | ②大清水 | ③清水洞 | ④宮の前   | ⑤御園東部 | ⑥御園南部    | ⑦石塚    |
| ⑧今泉    | ⑨原垣外 | ⑩鳥居原 | ⑪高尾    | ⑫大久保  | ⑬野底古墳群   | ⑭上牧古墳群 |
| ⑯長者屋敷  | ⑯芝垣外 | ⑰上の原 | ⑯牧ヶ原   | ⑯大宮原  | ⑰伊那東部中学校 |        |
| ②古町古墳群 | ②上垣外 | ②爪ヶ崎 | ②末広六道原 |       |          |        |

灰釉陶器。⑰上の原遺跡は縄文中期、弥生後期、平安時代須恵器。⑯大宮原遺跡は縄文中期。⑰伊那東部中学校遺跡は縄文中期。②古町古墳群(近年の調査によって近世の遺構と判明した)。②上垣外遺跡は弥生後期、平安時代土師器、須恵器、灰釉陶器。②爪ヶ崎遺跡は縄文中期・後期、平安時代土師器、中世城館跡。②末広六道原遺跡は縄文晩期である。

大原遺跡範囲地より1km程西進すると、竜東第一河岸段丘面が南北に長く連続的に発達している。この段丘突端面には前述した上牧古墳群、野底古墳群、この地点から、すこし、北に行くと福島古墳群がそれぞれ群集墳的であり、これらはかの有名な古代「福島郷」「弓良郷」の存在性を強く実証してくれる根拠の一つとなろう。

大原遺跡より北方へ2km程進むと、美原団地が大きな広がりを持ちながら、徐々にではあるが、周辺に拡大化を呈している。この団地造成をすることで、昭和53年7月下旬から8月一杯をかけて緊急発掘調査を実施したのが第1図に表示した②末広六道原遺跡である。その時の成果は次のようである。縄文晩期土坑17基(円形状のもの12基、長円形状のもの3基、方形形状のもの1基、不整円形状のもの1基)、竪穴1基。

土坑は全般的に見て覆土が人為的な埋め方を導入しており、何か墓坑的な色彩が濃厚と想定

できた。17基の土坑の内、10基より東海地方を代表するいわゆる縄文晚期条痕文系土器群類、編年学上でいういわゆる櫻式王・五貫森式土器片が相当量出土した。

この時期といえば、当然ながら水稻耕作文化がまず第一に考えられる。位置的に見て、この遺跡の近くに水稻耕作を営む湿地帯が小規模に展開していたのではないか。場合によっては、天竜川氾濫原にまで水稻耕作に出掛けたのではあるまい。

今回、緊急発掘調査を実施した大原遺跡付近からも弥生時代中期を代表する下伊那に隆盛した阿島式土器の出土例が『上伊那誌歴史篇』の中で、六道原旧伊那飛行場跡出土と記載されている。この土器はヘラ描き沈線と、縄文で飾られた壺形土器であって、現在、飯田市にある下伊那教育会資料参考館の一角に展示されている。

以上のような報告例を通して、大原遺跡周辺一帯には縄文時代晚期から弥生時代全般にかけてかなりの集落址の存在が想定できるのではないか。結果的になってしまふが、昭和40年代前半に実施された土地改良事業時には何も発掘調査を実施せずに破壊してしまった実状は、今になつて大きな後悔が残るわけである。

大原遺跡範囲地周辺一帯は前述したように六道原台地と呼ばれ、古代において、六道地藏尊発祥伝説が根強く伝わっている。このことについて『伊那市寺院誌』には次のように記されている。

「わが国における六道地藏の発祥は古く文徳天皇の仁寿2年（852）小野篁<sup>おのたけ</sup>が京都伏見の大善寺に六地藏を安置したのがはじまりと言われ、後、後白河天皇の保元2年（1157）平清盛がこれを諸国に分置したが、その時1体をこの信濃国笠原庄に堂宇を建てて安置したとも伝えられている。また、一説には笠原の牧の牧監笠原平吾頼直の墓とも言われる。縁日が旧暦の7月6日、7日と定められたのは、篁が京都五条にある玲瓏寺に詣で、冥土へ行って帰つて来たというその日に因んだものであろう。」

現在は8月6日で、この日は近郷近在から亡くなつた人々の供養のために、善男善女がつめかけ、殊に新盆の家では必ずここに詣でて松のほい（秀枝の意か）をもらい、これに仏を乗り移らせて帰り、仏壇に供えて盂蘭盆を待つ習慣になっている。」

さらに、古代といえば六道原台地周辺は『延喜式』や『吾妻鏡』に記載されている「笠原御牧」の存在性を極く必然的に考えてみなければならない。それについては今までに各種の多くの出版物に登場しているので、今回は割愛する。ただ、伊那市歴史シンポジウム『信濃の牧・春近領・宿場』の内、「古代信濃の牧」をまとめた書籍は大好評である。

江戸時代には六道原台地一帯ではなかなか高遠藩が開墾を許可してくれなかつた。これが許可されたのは幕末に美篶末広村が開村される時に初めて開墾の手が入つたわけである。今回、直接的に緊急発掘調査の動機となった太平洋戦争遺跡の代表として考えられる旧陸軍伊那飛行場跡の変遷については第Ⅳ章所見で詳細に述べることにする。

（飯塚政美）

## 第Ⅱ章 発掘調査の経過

### 第1節 発掘調査に至るまでの経過

今回、発掘調査の該当地となった大原遺跡は上の原保育所（仮称）の整備事業に伴う緊急発掘調査であり、調査が実施されるまでには各種の保護協議、事務上の手続きが実施され、それらの動きを年月日の順に従って記しておくことにする。

平成14年8月28日付けで、伊那市土地開発公社理事長小坂権男と市内遺跡発掘調査団（大原遺跡）団長御子柴泰正両者間で埋蔵文化財包蔵発掘調査委託契約書を締結する。

平成14年11月20日付けで、大原遺跡発掘調査終了報告書を長野県教育委員会教育長宛に提出する。

平成14年11月20日付けで、大原遺跡埋蔵物発見届の拾得についてを伊那警察署長宛に提出する。

平成14年11月20日付けで、大原遺跡埋蔵文化財保管証を伊那警察署長を経由して長野県教育委員会教育長宛へ提出する。

平成15年2月27日付けで、伊那市土地開発公社理事長小坂権男と市内遺跡発掘調査（大原遺跡）団長御子柴泰正両者間で変更委託契約書を締結する。

### 第2節 発掘調査の組織

緊急発掘調査に着手する前に次のような組織編成を行い、万全を期した。

委員長　登 内 孝

委 員　上 島 武 留

　　伊 藤 晴 夫

教 育 長　保 科 恭 治

教 育 次 長　伊 藤 隆

事 務 局　塚 本 哲 朗（生涯学習・スポーツ課長）

　　布 袋 壱代子（生涯学習・スポーツ課長補佐　女性室長）

　　白 鳥 今朝昭（生涯学習・スポーツ課長補佐　社会教育係長）

　　飯 塚 政 美（生涯学習・スポーツ課主幹）

　　山 口 千江美（生涯学習・スポーツ課主査）

　　北 林 太（　　）

　　唐 澤 直 樹（　　）

　　田 原 節 子（　　）

### **発掘調査団**

団長 御子柴 泰正（長野県考古学会会員）  
調査員 飯塚政美（日本考古学協会会員）  
　　本田秀明（長野県考古学会会員）  
作業員 城倉三成 織井和美 酒井公士郎 有賀秀子 那須野進 松下末春  
　　小田切守正（敬称略順不同）

### **第3節 発掘調査日誌**

平成14年9月10日(火) 午前中は伊那市考古資料館にて発掘機材、測量機材の点検、整備を実施して発掘調査に万全を期す。午後、発掘現場へ運搬する。

平成14年9月11日(水) 減反政策の証として水田に蕎麦を栽培してあった。トレンチ設定をする場所を南北に長く帯状に根をこぎ、トレンチ発掘が順調にいくようとする。スペースハウス・コンテナハウスを建てる場所を選定し、その場所をバックフォーにて整地を行う。午後、二つのハウスを建てる。

平成14年9月17日(火) トレンチを設定して、掘り進めるが、午前10時頃になると急に雨が降り出してきたので、発掘作業を中止する。

平成14年9月18日(水) 上の原保育所（仮称）敷地内の南東隅より西に向かって南北に長く、第1号トレンチ、第2号トレンチ、第3号トレンチと設定して、掘り進める。前の二つのトレンチの掘り下げをほぼ済ませると同時に写真撮影を終える。第2号トレンチ内より軍靴の底が出土し、戦争遺跡の名残が見え出した。

平成14年9月19日(木) 第3号トレンチ、第4号トレンチ、第5号トレンチの完掘を終える。天気の良いうちに第3号トレンチ、第4号トレンチの写真撮影を済ませる。

平成14年9月20日(金) 道を隔てた北側へ、南北に細長くトレンチを入れる。東側より西側に向かって第6号トレンチ、第7号トレンチ、第8号トレンチ、第9号トレンチと命名し、その位置を決定する。第5号トレンチを完掘し、写真撮影を終える。第6号トレンチ、第7号トレンチの二本を完全に掘り上げる。

平成14年9月24日(火) 第9号トレンチの西側に平行状に二本のトレンチを設定する。これらを第10号トレンチ、第11号トレンチと名付けて掘り進めて、夕方までにはほぼ掘り上げる。第6号トレンチ、第7号トレンチ、第8号トレンチ、第9号トレンチの写真撮影をする。

平成14年9月25日(水) 引き続いて、西側に第12号トレンチ、第13号トレンチ、第14号トレンチまで完全に掘り上げる。直ちに第10号トレンチ、第11号トレンチ、第12号トレンチの写真撮影を済ませる。

平成14年9月27日(金) さらに西側へ第15号トレンチ、第16号トレンチ、第17号トレンチを設

定し、それらを完全に掘り進めると、旧陸軍伊那飛行場跡地にかつて設置されていた防火用貯水槽の破壊された残骸の一部分が発見された。第13号トレンチ、第14号トレンチ、第15号トレンチの写真撮影を済ませる。

平成14年10月3日(木) 第16号トレンチ、第17号トレンチ、第18号トレンチ、第19号トレンチまでを完掘。本作業を終えた後、先の4本トレンチの写真撮影を終了する。

平成14年10月8日(火) 第8号トレンチ、第9号トレンチ、第10号トレンチの北側付近を拡張



発掘風景



発掘風景



発掘風景



測量風景

して、掘り下げを進めると、遺構の検出は何もなかった。

平成14年10月9日(木) 前日と同様な作業を実施する。

平成14年10月10日(木) 防火用貯水槽のある付近を拡張すると、構造物の本体であったコンクリート製の壁面が発見され、直径は8m程度あった。

平成14年10月11日(金) 防火用貯水槽の平面プラン、断面の状況を確認して掘り進める。

平成14年10月17日(木) 第1号トレンチから第19号トレンチを全測図に図示する。第20号トレンチ、第21号トレンチ、第22号トレンチを設定して、掘り進め、夕方までに完全に掘り下げるを完了する。午後より埋め戻しを開始する。

平成14年10月22日(火) 防火用貯水槽及び第1号竪穴、第2号竪穴、それぞれの断面図作成。この作業を終えて、後者の二つの竪穴を完全に掘り上げる。一部、埋め戻しを進める。

平成14年10月23日(水) 第1号竪穴、第2号竪穴の写真撮影を終える。防火用貯水槽の平面実測。埋め戻しを続行する。

平成14年10月24日(木) 防火用貯水槽の平面実測並びに埋め戻しを進行する。

平成14年10月25日(金) 第1号竪穴、第2号竪穴の断面実測、第1号トレンチ、第6号トレンチの東側を南北に通してセクション図を作成する。

平成14年10月29日(火) トレンチの埋め戻しを進める。防火用貯水槽の北側半分を掘り下げる。

平成14年10月30日(水) 防火用貯水槽の写真撮影終了。埋め戻しを進行する。

平成14年10月31日(木) 防火用貯水槽の埋め戻しを完了。本日をもって発掘調査終了。午後、測量機材、発掘機材の後片付け、それらの運搬を実施する。

平成14年12月～平成15年2月 報告書の図面、図版作成、原稿執筆、編集を終えて、印刷所へ入れて、印刷を開始、校正を行い、3月の報告書刊行に努力を払った。

平成15年3月 報告書を刊行し、本事業の完了をみた。

(飯塚政美)

## 第Ⅲ章 発掘調査

### 第1節 調査の概要

大原遺跡周辺一帯は前述したように都市計画用途区域と農振農用地区域とが混在した姿となってきている。つまり、田園風景と住宅風景とが一地区で二つ見られる実態である。加えて、この一帯は年々、住宅化が急激度を増してきており、近い将来は田園風景が消滅する可能性がかなり濃厚と思われる。

大原遺跡地の発掘調査地点は、現在、全て水田化されているが、その耕作物は水田転作の一環として蕎麦が栽培されていた。太平洋戦争時の旧陸軍伊那飛行場の造成時と、昭和40年代前半に実施された土地改良事業と二回にわたる大規模開発によって地盤が相当変動されているものと想定して発掘調査に取り掛かった。取り掛かってみると、テフラ層の移動はほとんどなくして、その上層である黒土層、褐色土層での土の大量の移動が認められた。掘り進めていく段階で、前述したような大小様々な起伏の存在が確認できた。土層の堆積状況は造成時の埋土以外は全て自然の堆積状況を呈しており、遺構検出は割合に安易であった。

3,000m<sup>2</sup>に及ぶ広範囲の調査であったが、遺構として太平洋戦争時の防火用貯水槽1基、竪穴2基の検出に留まっただけである。



## 第2節 遺構と遺物

### 防火用貯水槽（第3図 図版5～6 口絵）

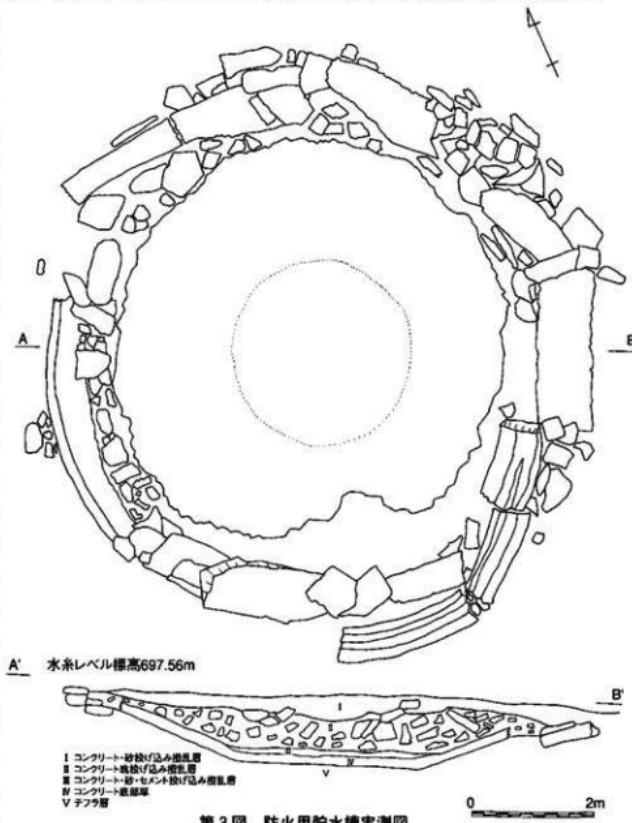
本遺構は発掘調査地区の西側、第16号トレンチから第17号トレンチの中央から南側にかけて検出された旧陸軍伊那飛行場格納庫のための防火用貯水槽である。これについては構築時と、廃絶時に手伝いをした近くの住民の聞き取りによって分かった事実として書き留めておくことにする。遺構の検出されたレベルは表土層面より約1m20cm下ったソフトテフラ上層面であり、廃絶時に取り壊したコンクリートの大きな塊が厚く堆積していた。これらは防火用貯水槽の周縁壁であり、その組成状態は極めて悪かった。

現存している基礎部分より見て、上部の直径は8m程度で、底面の直径は3m程度を測定できる。断面はゆるやかな

な摺鉢状を、底面は平坦をそれぞれ成していたと想定できる。

構築当時、周縁を取り巻いていた部分は高さは約1mであったと、構築を手伝った人が語ってくれた。

縁の上段部分に段が付けてあった事が今回実施した発掘調査によって判明した。縁の厚さは45cm程度、底部の厚さは10cm程度のコンクリートが貼り付けられていた。下部は、コンクリートに荒い砾だけを混ぜてあり、砂はほとんど使用していないので、でき上がりは極



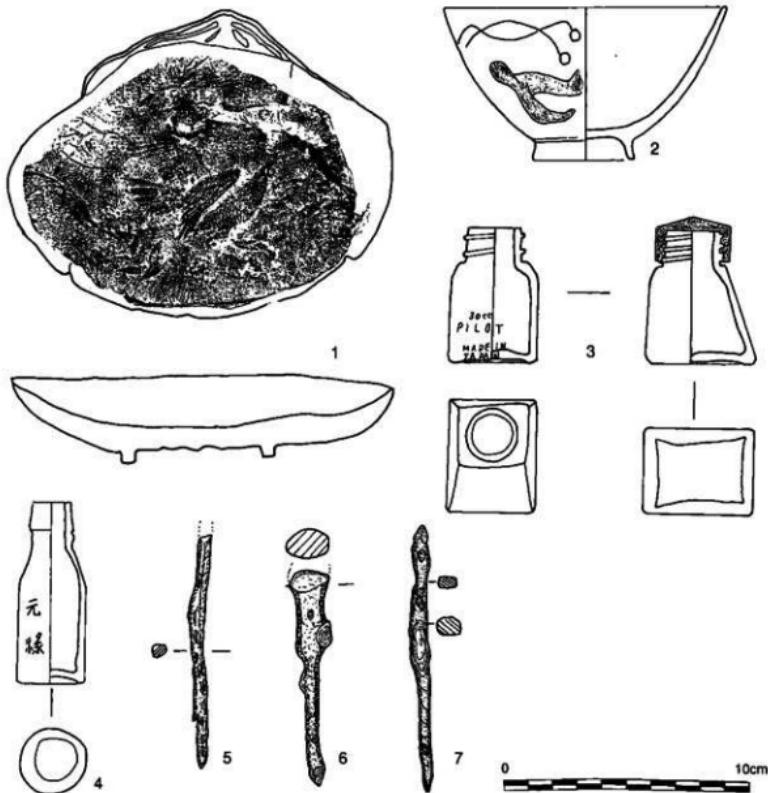
第3図 防火用貯水槽実測図

めて粗雑であった。さらに、鉄筋を全く入れてないのでコンクリートが板状に剥落しやすい状態であった。

仕上げはトロ工法（セメントだけを使用して、ほかには何も混合しない）を用いてあった。後世の破壊の時は立ち上がり部分から縁を大型ハンマーにて砕き、内側へ向かって倒したと、実際に手を掛けた人が説明をしてくれた。

遺物（第4図 図版8～9）

(1) はアルミニウム製の貝殻状皿である。底に突起状のものを二つ付け、安定性を増している。上部には貝類に付いている貝柱の文様を、内部には敲き出し全工技法によって鷹が羽を大きく広げた状況を意匠的に、それぞれ描き出している。鷹の図柄を採用した一面にはそれの強さに憧れ、戦勝祈願の一つと考えられるのではないか。



第4図 防火用貯水槽内出土遺物実測図

(2) は図上復元によって、口縁径11.5cm、器高6.1cmを測る高台付磁器製の飯茶碗である。図柄は白地の上に赤色を絵付したサクランボと黒味の強い曲線文様を描きながらの動きを表現している。

(3)～(4)はガラス瓶である。(3)はインク瓶、戦争当事者は言語統制のもとに横文字の使用は厳しく取り締まられていた。これにははっきりと横文字が読み取れる。今日のように連絡手段が複雑化していなかった当時にとっては書くことが唯一の連絡手段であった。戦地及び入営者の連絡用にインクで書き綴った手紙が大いに用いられた。その為に特別に横文字の使用を許可されていた。以上のことについてはパイロットインク本社の研究員が語ってくれた。(4)は越中富山産の薬瓶であり、薬売りによって伊那谷に入ってきたのであろう。(5～7)は鉄製の釘で、腐食度は急激度を増している。(1～2)、(4～7)は昭和前期頃の遺物であろう。

(飯塚政美)

#### 第1号竪穴（第5図 図版7）

本竪穴は第8号トレンチの南側に近い付近で検出され、表土層面より30cm程度下ったソフトテフラ層上面を掘り込んで構築され、南北1m80cm位、東西1m90cm位の規模を有し、部分的にはほんのわずかに凹凸は見られるが、全般的みて、円形状を呈するが、下面部に至っては面取りをしてある。

壁高は1m20cm程度と深く、壁面は四つとも外傾気味でわずかな凹凸を認める。床面はハードテフラ層中に設けられ、若干の凹凸はあるが、大般良好であった。

床面中央部付近に直径20cm位、深さ15cm位の小ピットが穿けられており、その形態をよく観察してみると、小さな柱が建てられそうであり、円錐形のほんのわずかな屋根があったのではないか。

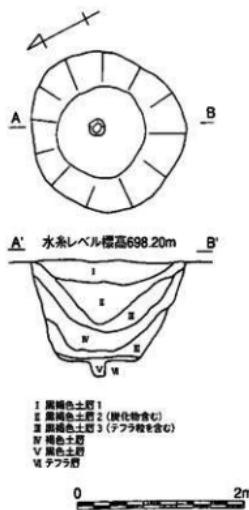
戦地でよく見られる蛸壺風的な用途を成していたのであろうか。

遺物 遺物の出土は何もなかった。

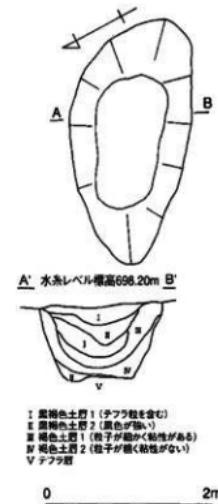
#### 第2号竪穴（第6図 図版7）

本遺構は第7号トレンチの北側に近い付近で検出され、表土層面より30cm程度下層のソフトテフラ層上面を80cm位掘り込んで構築してある。平面プランは若干の凹凸が見られるが、全般的には、東西に長い長円形状を呈する。

規模は南北1m40cm程度、東西2m80cm程度を、壁高は70cm



第5図 第1号竪穴実測図



第6図 第2号竪穴実測図

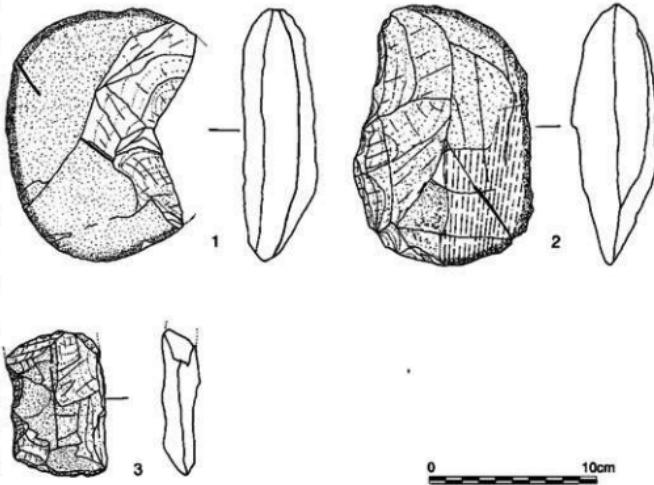
~90cm程度をそれぞれ測る。整面の状態は南、北、東側では外傾気味で、凹凸が多く、西は外傾気味で凹凸が少なかった。床面は軟弱で、極めて凹面が多かった。蛸壺風的用途であろうか。

遺物 遺物の出土は何もなかった。

(本田秀明)

### (1) 縄文時代の遺物 (第7図)

第7図の3点は全て表面採集による石器である。(1)はやや大型の硬砂岩製の円盤を利用しており、周縁部には敵打痕を認められるいわば敵石の一種かと思われる。右側面の欠損部は節理面が走っており、後で、自然に破壊されたのであろうと思わ



第7図 石器実測図

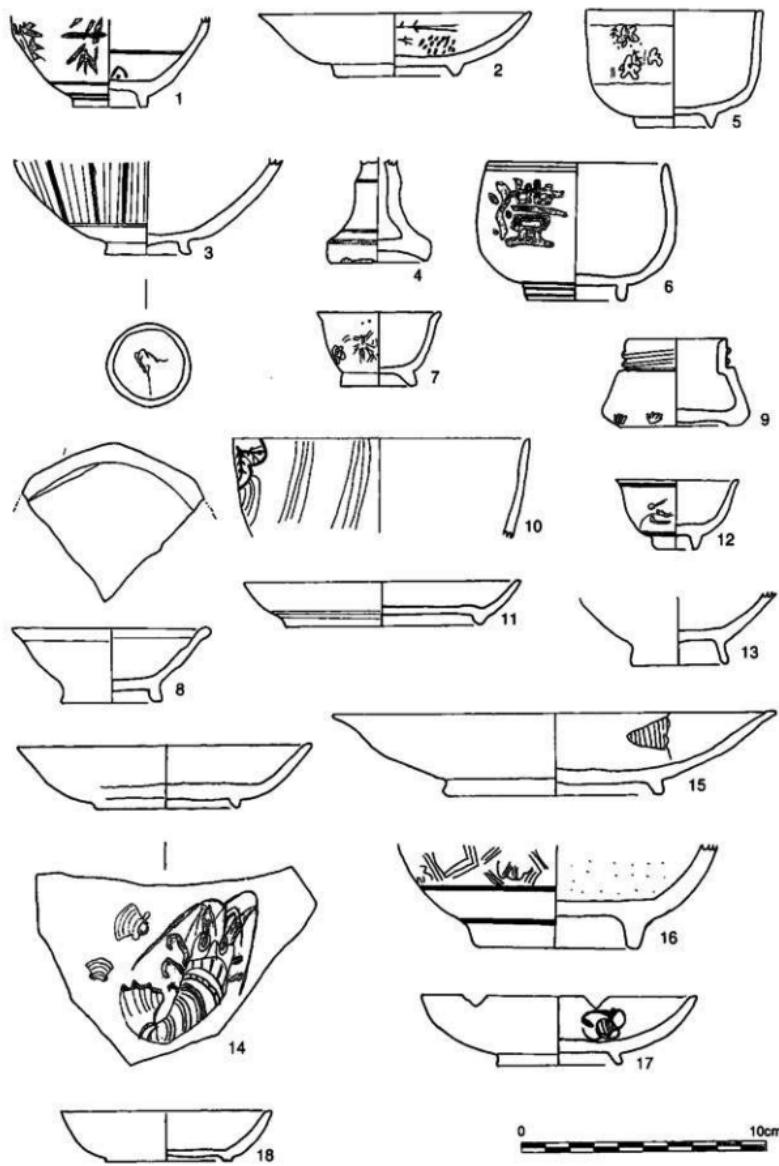
れる。(2)は円盤の片面の側面を打ち欠いて製作したいわば碟器的用途を有し、緑色岩製である。一部分に磨きが認められ、砥石の用途を併用していることが分かる。(3)は極、一般的に見られる緑色岩製の打製石斧の一種で、短冊形を成し、上端部は欠損している。(1~2)は縄文期の古い方で、(3)は縄文中期に使用されたと思われる。

### (2) トレンチ内出土遺物

磁器・ボマード瓶 (第8図)

第8図 (1~17)は全てトレンチ内出土であり、それらの内訳を記すと次のようになる。

(1~3)は第5号トレンチ、(4)は第6号トレンチ、(5)は第7号トレンチ、(6)は第8号トレンチ、(7~8)は第9号トレンチ、(9~17)は第10号トレンチ、(18)は第17号トレンチである。(9)を除いた他は全て昭和前期頃の磁器である。ちなみに(9)はボマード瓶で、太平洋戦争後の所産であろう。第8図の実測図は全て図上復元によっていることを申し添えておく。



第8図 磁器・ボマード瓶実測図

(1、3、10、13)は飯茶碗類で、外面に竹葉文風に(1)、線状文風に(3)、花柄文風に(10)の文様が呉須にてそれぞれ染付されているが、(13)は無文である。

(2、8、11、14、15、17、18)は皿類に含まれ、これらのうち器形からみて、稜皿(8)、段皿(11)、大皿(14、15)、中皿(2)、輪花皿(17)、小皿(18)に大別できるのであろう。絵柄から見てみよう。内・外面ともに全く無地(8、11、18)、内面に呉須にて染付が点列文風に(2)、花卉文風に(17)に施されている。(15)は青磁風焼で、内面に赤色の絵付をしてある。(14)は蛤と海老を画材に選択し、祝事に使用できるようにしてある。蛤は黒く、海老は朱色で絵付し、一層の美的効果をねらっているようである。

(5～6)は湯呑茶碗である。(5)は外面に花柄文風を黒、緑、赤の三色にて絵付を施し、一見するにとても豪華さをかもし出している。(6)は器の上部と高台の全面にわたって呉須による染付にて線文を横走させ、その中間部に呉須にて文字を染付状に表現している。

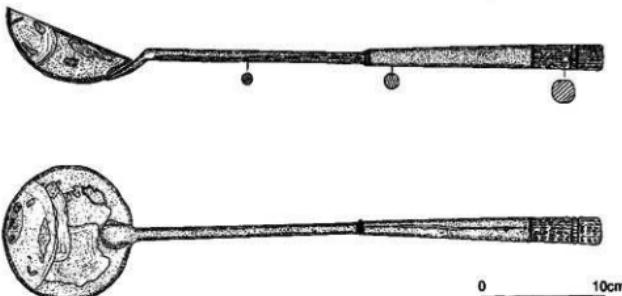
(4)は仏飯器の一種で供献具である。外面に赤色の同心円形状文を数段にわたって絵付を施し、仏前への供物用具としての風格が整えられている優品である。

(7、12)は盃であり、外面が金色的風な絵付(7)、呉須による染付(12)に大別できる。盃としては極一般的であろう。

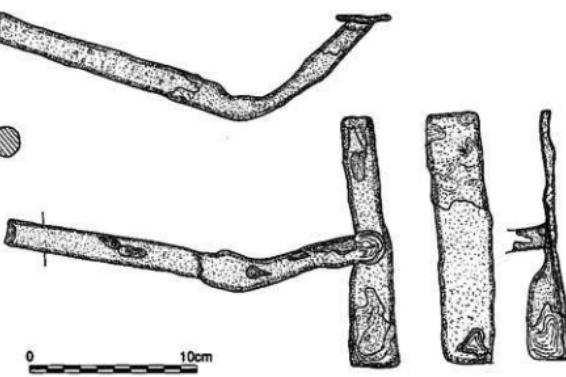
(16)は鉢であり、外面に赤絵風技法を取り入れた極めて優品に分類可能であり、非常に高価であったために、その販路をつきとめたいものである。

#### 鉄製大型杓文字 (第9図 図版8)

これは第2号トレンチ内より出土した。全



第9図 鉄製大型杓文字実測図



第10図 鉄製プロペラ状工具実測図

長は48.5cm、汁類を盛る、いわば碗の部分の直径は11.1cm、その最深部は3.9cmを測る。柄の部分に木を挿入し、それに2本の溝を刻み込んで、滑らないように持ちやすく作り上げてあり、木質部をはめ込んだ部分は円形状を呈し、小さな止金2本にて固定してある。共同炊事用に利用されたと思われる。良質な鉄を使用してあるので、保存状態は良好である。

#### 鉄製プロペラ状工具（第10図 図版8）

これは第7号トレンチ内より出土した。全長は23cmを、その内、柄の部分は21cm、プロペラ部の幅は2cm、長さ15cmをそれぞれ測る。柄の部分は直径1.8cmの鉄棒を用い、それに鉄板を溶接してつくり上げている。その部分が実測図を見れば一目瞭然であるが、まさしくプロペラ状を呈しているので前述したような名称を当てはめた。柄の部分は製作当時は真直ぐであったが、何かの力が加わり、現在は大きく曲がっている。良質な鉄を用いているので、残存状態は良好であり、何に使用したかは分からぬ。

#### 各種の金属器類（第11図 図版8）

第11図に掲載した各種の金属器類は全てトレンチ内より出土したものであり、その内訳を記すと次のようである。（1）は第8号トレンチ、（2～3）は第19号トレンチ、（4～6）は第8号トレンチ、（7～14）は第9号トレンチ、（15～16）は第10号トレンチ、（17～18）は第19号トレンチ、（19）は第21号トレンチ。

#### 鉄製針金（第11図（1～3）図版8）

これらは鉄製針金であり、あまり良質なものを使えていないので、腐食度の浸透が顕著で、もろくなり、各所で大きく曲がっている。（2～3）は中心部が露出した状態で螺旋状を呈し、針金の製作工程がよく分かる。

#### 鉄製釘（第11図（4～15）図版8）

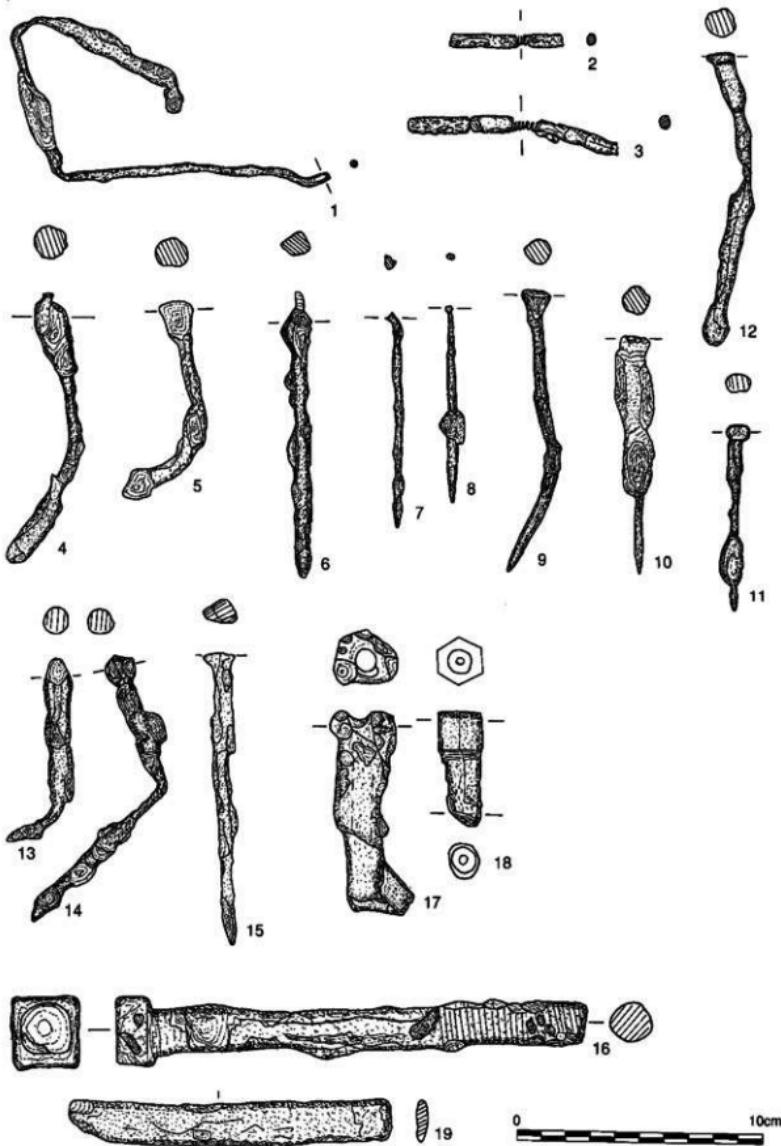
釘に関しては、今回の発掘調査で、かなり多量に検出されたが、ここに掲載するのはそのうちでも割合に保存状態が良好で、ほぼ原形を留めているものに限定した。ここに掲載したのは全て鉄製である。釘自体も形態から見て何種類かに分類が可能である。釘頭が円形状で、かなり太く、長いもの（4～5、10～14）、釘頭が角状で、かなり太く、長いもの（6～15）、釘頭が円形状で、細長い形態のもの（9）、釘頭が円形状で極めて細身のもの（8）、釘頭が方形形状で極めて細身のもの（7）等々である。全般的に見て、良質なものを用いているので、ほぼ原形に近い形態が判別できるのである。

#### 鉄製管（第11図（17））

これは中心部が空洞になって、いわば管状を呈している。腐植度の進行が顕著で、全体的な形態は現段階では不明であり、したがって使用目的も判断できない。

#### 大型ボルト（第11図（16、18）図版8）

これらは鉄製（16）、銅製（18）に大別できる。（16）は全長が19cmを測定でき、極めて大型化を成している。頭は方形状を呈し、先端部には6.5cm程度のネジ切り痕が明瞭に認められ、



第11図 各種の金属器類実測図

かなり大型の建造物に使用された可能性が濃厚と思われ、格納庫の本体工事の継目部分に用いられた一本ではないだろうか。(18)の頭部は六角形状を呈し、ネジ山の残存している部分は緑青の吹き出しが多く、青々と光沢を放っている。中央部分は管状となっており、いわば格納庫建設の細部の継目のような特殊な部分に使用したのではないか。

#### 鉄製小刀 (第11図 (19) 図版8)

全長13cm、幅1.5cmを測り、刃部は若干鋭角状になっており、携帶用の小刀として使用されていたのであろう。

#### ガラス瓶類 (第12図 (1~2) 図版9)

この図に掲載した二つのガラス瓶のうち、(1)は第8号トレンチ、(2)は第11号トレンチよりそれぞれ出土している。

(1)は化粧用、(2)はインク瓶と用途を別にしており、(2)ではガラスペンを使用したのであろう。(1)は底面が八角形状を呈し、縦側縁に円月状の五つの浅い凹みを付け、五本の指で押さえやすいような工夫の一つであろう。(2)は底面が正方形を呈し、中央部に16弁の菊花文を刻印してある。(1~2)はともに太平洋戦争時の遺物であろう。

#### 電気関連器具類 (第13図 (1~9) 図版9)

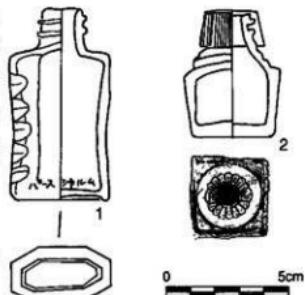
本図に掲載した電気関連器具類で、(1~2)は第8号トレンチ、(3~4、6~7、9)は第9号トレンチ、(5、8)は第10号トレンチ内よりそれぞれ出土している。(1~4)は電気配線の時に要所、要所に固定し、線を巻き付けて置く、「碍子」と呼ばれているもので、(1)はやや大型、(2~4)は普通型であり、全て円筒形状を呈し、細部を見ると下端部がやや開くもの(1)、直線状のもの(2~4)に細分できる。(3~4)は商標が描き出されている。4個とも陶製で白色を呈している。

(5、7)は「モーガルソケット」の一種で、陶製である。円形状(5)、隅丸方形(7)の形態を成し、円形状の小さな穴が無数に穿けられており、それらを利用してしっかりと固定されていたものであろう。(7)には(1~5)までの算用数字をはっきりと明示させ、差し込み方法の状況が一目で分かるようにしてある。(5)は白色、(7)は薄いクリーム色である。

(6)は陶製の安全器で、白色を呈す。

(8)は天井板に貼り付けて、電線を固定したいわば変形的な「シーリングローゼット」のような役割を果たしている。陶製で、デザイン化が優れていて、薄い青白色を呈し、目に柔軟感を与える。

(9)は円筒形の中に線を通した「碍管」と呼ばれるもので、陶製である。以上、電気関連器具類の諸特徴を述べてきたが、直接的に格納庫建設に関連づけられるのはどれか、電気工事屋さんの意見を大いに聞くべきであろう。

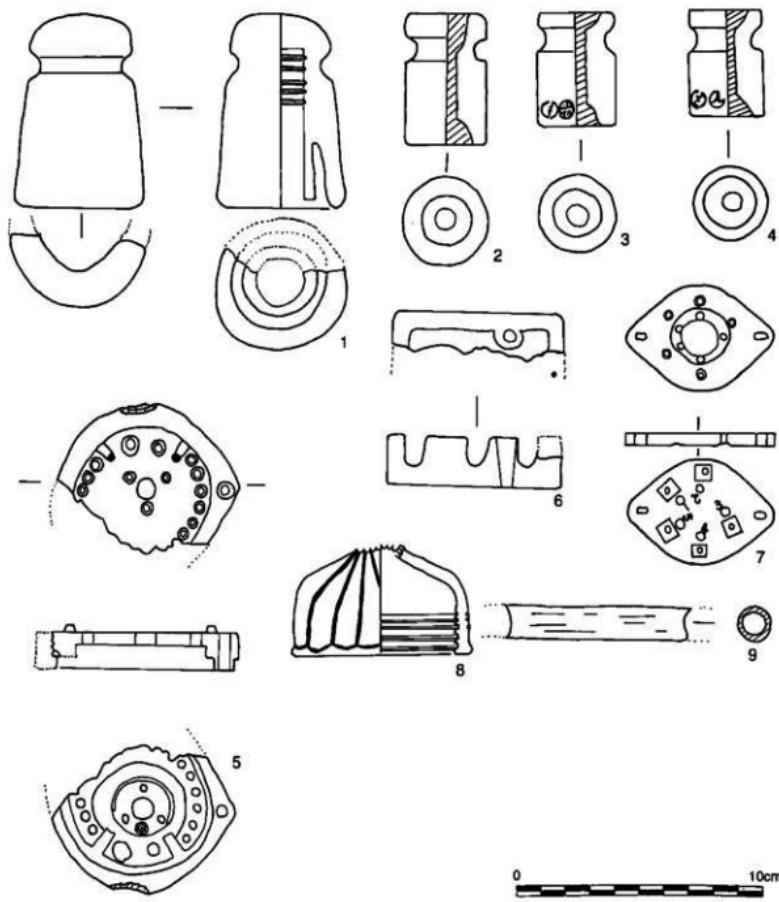


第12図 ガラス瓶類実測図

革製品類（第14図（1～5）図版9）

本図に掲載したのは革製品類で、(1)は第2号トレンチ、(2～3、5)は第10号トレンチ、(4)は第8号トレンチ内よりそれぞれ出土している。(1)は軍人さん達が着用したいわゆる「軍靴」と呼ばれているもので、足型に型どられた周縁に沿って縫目の穴が見られる。底は6枚の革を貼り付けて高くし、最下部に鉄製の方形状で、小さなビンを打ち込んである。明らかに太平洋戦争時の遺品である。

(2、5)は小児用の靴底である。(3)は帽子（英語でキャップと呼ばれている）の底部

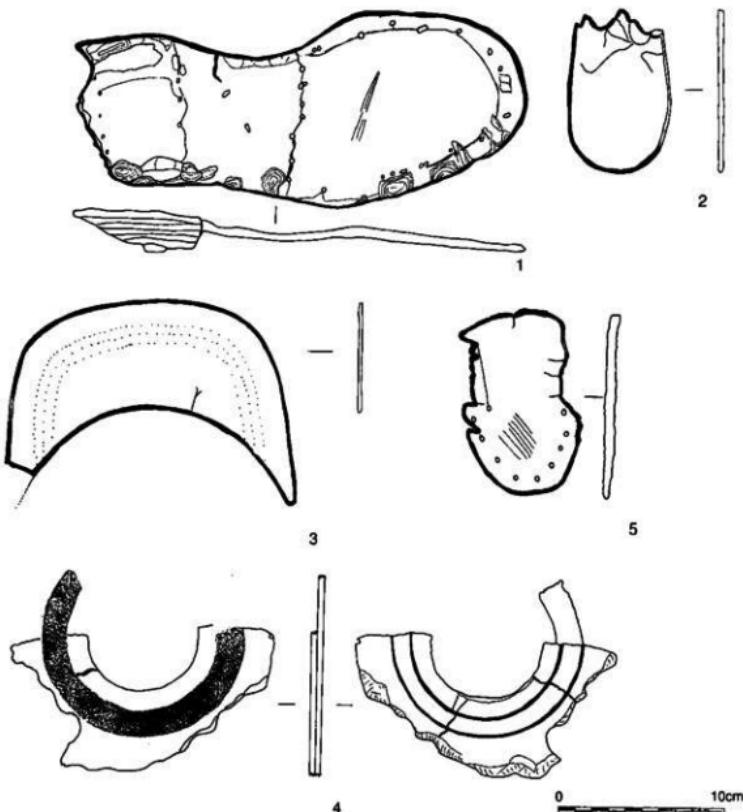


第13図 電気開閉器具類実測図

分であり、糸の縫目が半月形状に三重に廻してある。(2、3、5)は直接的に太平洋戦争時の遺物かは多くの疑問が残る。むしろ、太平洋戦争後の可能性が濃厚と思われる。

(4)は革下地の上に麻布を貼り付けてある。想定するに、大きなパイプの外周支えに使用されたのではないか。麻布を貼り付けることによって滑り止めとなつたのであろう。あるいは、格納庫建設時に付設されたパイプに取り付けられたかも知れない。

(飯塚政美)



第14図　革製品類実測図

## 第Ⅳ章 所 見

今回の発掘調査に至るまでの主たる動機は「旧陸軍伊那飛行場」の実態を如何に究明するかが第一であった。その過程として、これの歴史的な動向を知つておくのが早急に必要と考え、極、簡略的な流れを記しておく。これらを記述するに当たって、久保田道著『伊那谷の青い空に』－高校生の追う陸軍伊那飛行場物語－に全面的によっていることを申し添えておくので御容赦願いたい。

まず、最初に長野県箕輪工業高校地域社会研究ゼミ「陸軍伊那飛行場研究班」を中心となって調査を進めている段階で、直接的に手を掛けた人々に情報を得ることにした。その意思を察して戦争当時、旧陸軍伊那飛行場建設隊長で、最高責任者であった沢田敏男中尉から寄せられた一通の手紙によって記すことにする。中尉は戦後、京都大学教授、同大学総長を歴任している。

「旧陸軍伊那飛行場建設の概要」

(一) 設置責任者及び建設担当者

陸軍航空本部

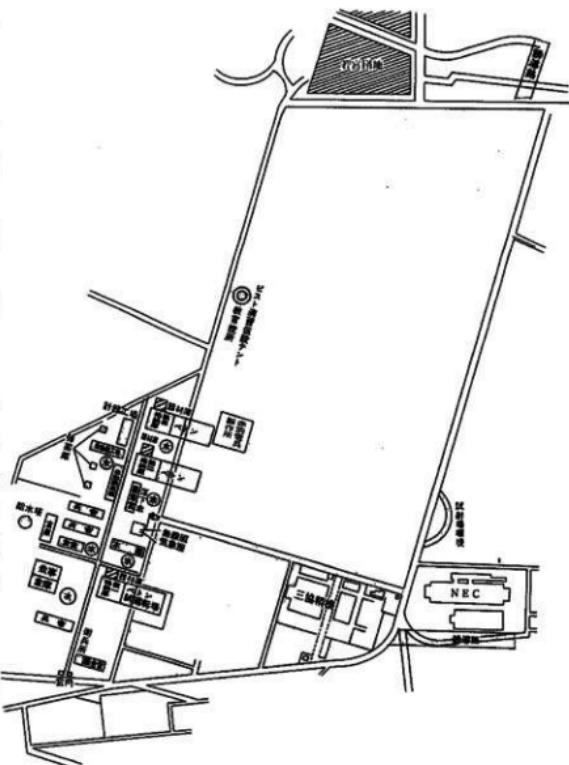
陸軍航空本部付飛行場特設第一作業部隊は昭和18年10月頃までの初期は、豊橋の中部100部隊（野戦における飛行場設定部隊）が部隊の設定訓練用として建設に着手した。

(二) 建設期間

昭和18年4月頃から昭和20年8月

(三) 飛行場用地規模

伊那市六道原 標高650m～700m、南北約2.0～



第15図 旧陸軍伊那飛行場復元図  
(草圖として勤務していた白石光定さんの協力で完成)

2.5km 東西約0.6~0.8km

面積 約150ha

格納庫 木造ジベル（木材の接合に用いる金具の一つ）

継目構造 40m×40m 3棟

誘導路付掩体 20カ所

本部、兵舎等建築物 数棟

滑走路南北方向（芝植栽）幅80m~長さ

1.300m

#### （四）飛行場建設目的

主に訓練用秘匿飛行場（昭和19年頃より熊谷飛行学校が使用開始）

#### （五）飛行場建設上の特徴

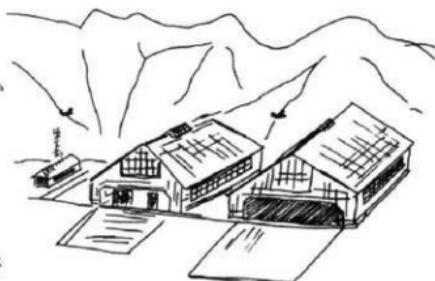
- ・早期に完成したこと

約60万立方メートルの切土を行い、二つの谷を埋めて1.300mの主要滑走路を約3カ月で完成した。当時、機械化の貧装備の下の施工としては全軍的に注目された。

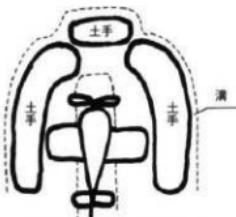
・木造格納庫として長スパントラス（長く大きな構造物を造るときに適する方法で、柱の間隔が広く、三角形ができるように木材を組み合わせたもの）の工夫をし、成功したこと。  
木造トラス節点にジベル継目構造を用いて航空本部として初成功を収めた。

- ・艦載機の訓練に適した飛行場であったこと。

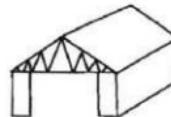
河岸段丘の地形であるため三峰川方向（南方向）より飛行



第16図 格納庫スケッチ（牧野一二氏）



第17図 飛行機の置き方  
(飛行機を木の枝などかけて隠した。)



第18図 長スパントラス工法の  
木造格納庫



現存している格納庫の基礎部分（建築当時の鉄筋がむき出しになっている）（保育所の南側）



現存している格納庫の基礎部分  
(保育所の北側)

し、着陸する場合30m程の急段差があり、丁度、海上における艦載機の着艦に似た訓練ができた。

最後に、沢田氏は「飛行場が早期完成できた主要因は、地域住民（勤労動員部隊）や近隣の小中高生徒の勤労奉仕によつたものであることを強く指摘している。

完成した飛行場では毎日「赤トンボ」の練習機が大空一杯に飛んでいたこと、また、若かりし頃、勤労奉仕動員を経験したこと等を古老達はしみじみと語ってくれた。

この辺で、太平洋戦争突入までの、全国的な視野に立った上の、いわば太平洋戦争勃発前史を「物質的」な面から論じていく。

昭和12年（1937）7月、盧溝橋事件を契機として日中全面戦争へとまっしぐらに入り込んでいったのである。翌年の5月5日には「国家総動員法」が施行された。この法律は国家の人的・物的資源を政府統制、運用して、國家の総力を国防目的一色に集中するためのものであった。国民は軍事産業に徴用され、衣料品、食料品、医薬品、石油、電力、建設資材などが、政府の管理統制下におかれ、このことによって、国民生活は直接的に大きな影響を受けた。産業全般にわたる経済統制の強化によって、資材有効利用促進助長のために配給統制や企業の経営合理化が一層、推進された。そのあたりを陶磁器界でも大きく受けた。

昭和15年（1940）には製品の公定価格設定、翌年には「企業整備令」が制定された。この法律によって製品の規格統一（いわば単純化）や共同販売制が確立された。この動きを採用したのが、東海地方を中心に生産されていた「国民食器」と総称される陶磁器類である。

昭和13年（1936）頃には日中戦争が泥沼化した時期に及んで、経済統制はますます強制度を増していく。この動向の中で、貴金属、繊維製品、革製品などは民間での消費は一層厳しく規制され、軍需優先へとまいしんしていくのである。反面、前述したものの「代用品」が登場していく。特に、金属製品の代用品として多くの陶磁器製品が出来てくる。政府は昭和16年（1941）年7月に「金属類回収令」を発布し、各家庭にある鍋、釜にいたるまでの各種雑多な品々を回収し、さらに、寺院の仏具、梵鐘類、神社の祭祀容器類などまでも供出させられた。昭和19年（1944）頃から、有田、京都、瀬戸では陶製貨幣の試作がこころみられたが、実用化に至らずに敗戦となってしまった。

以上、述べてきたことを頭の隅において頂いて、実際に出土した遺物の内容、意義づけを考



伊那飛行場で訓練中の「赤トンボ」（箕輪工業高校細田明先生提供）

『伊那谷の青い空に』より

慮して見ていただければ、より深い興味が湧き出してくれると思われる。

今回の発掘調査地点については「第2図 地形及び遺構配置図」「第15図 旧陸軍伊那飛行場復元図」内にそれぞれ表示されている「赤羽電具製作所」の位置から想定して、ここは飛行場敷地内で格納庫と兵舎が建てられていたことが理解できる。

実際に発掘調査を進めてみると、格納庫に関連する破壊された防火用貯水槽が検出され、本文中にも書き綴ってあるが、戦争当時の物資不足の状況をよく物語っているように、鉄筋は1本も使用されず、コンクリート造りも極めて粗雑であったことを物的な根拠に基づいて実証してくれた。

次に、遺物の面から見てみよう。兵舎の存在が第15図よりある程度分かり、兵隊さん達の日常生活の一端を垣間見るような、いわば、生活用品的な遺物の出土が見られた。それらは食生活に関する磁器類であり、用途的には飯茶碗類、皿類、湯呑み茶碗類、盃類、鉢類等々であった。特殊なものとして、共同炊事用の鉄製大型杓文字が1点出土した。さらに、1点ではあるが仮壇に供物を盛る仮瓶器の出土がみられた。入営する直前に、家族あるいは身内を亡くした者が供養のために持ち込んだのであろうか。このような行為が歴然としてできたのか。その点は疑問が残るのである。

ガラス瓶類に含まれるものとしてインク瓶、薬瓶が出土。前者はガラスペンと一体的に、後者は液体飲薬用にそれぞれ利用されたのである。各種の金属器類としては鉄製針金、鉄製釘、鉄製管、大型ボルト、鉄製小刀が出土し、前の四つは全て、格納庫、兵舎建設に、最後の一つは生活用品に、それぞれ有效地に利用されたのであろう。

なかでも、大型ボルトは前述した二つの建物本体工事の一番核心部分に用いられたことはその大きさからして想像できるのである。

電気関連器具類として、碍子、碍管、モーガルソケット、シーリングローゼット、安全器類が出土している。これらは、いわざとしたりのように電気の配線に必要不可欠な部品であり、格納庫内、兵舎内に整然と取り付けられ、電気が隅々まで流れるようにしてあったのであろう。

革製品として、軍靴があげられる。これは戦争遺物の最右翼の一つにあげられる一品であり、兵隊さん達がこれを履いて勇ましく活歩していた姿が目に浮かんでくる。

これらの遺物は平和資料館の施設に展示すべきである。

以上述べてきた遺物をより一層深く究明するのには「産業考古学」的分野の手助けが早急に課せられる。

近年、太平洋戦争遺跡の重要性が、文化庁を中心にして大いに呼ばれ、全国的に見て各所で保存・保護運動が展開されている現状であり、将来的に今回、実施した「旧陸軍伊那飛行場跡」もその一つに加えられるのであろう。

最後に、旧陸軍伊那飛行場の動向が一目で分かるように「旧陸軍伊那飛行場関係年表」を懸げておく。

(飯塚政美)

旧陸軍伊那飛行場関係年表

年（昭和）・月・日			年（昭和）・月・日		
1942	17	この年の暮れから伊藤三男氏航空本部へ陳情（伊部町長などとも連絡）	1945	20	この頃サイパンの米軍基地よりB29による本土空襲本格化
1943	18	4・ 航空本部、村田少佐、伊藤氏を伴って来伊（現地視察）			特捜三期生伊那を発つ（全員南朝鮮の大邱へ）
	8・	伊那飛行場用地100ha買収、着工 陸軍航空本部付飛行場設定第一作業部隊（十月頃まで設置の中堅100部隊が飛行場設定訓練として建設に着手）			所属変更（各務原陸軍航空工廠伊那出張所となる）中島飛行機（現富士重工）からくる本体に機銃・計器・落下タンク等を装し戦闘機に仕上げる作業実施一輔給戦隊となる。
	11・	施設部隊（金沢師団）の将校が伊那国民農業指導所に飛行場建設に都民の労動奉仕勤員を命ず		3・9	東京大空襲（死傷者12万人）
	11・10	株木組160人、松村組180人の朝鮮人労働者來伊 ＊朝鮮人作業部隊「農耕隊」（約200人）も導入されていた－美鷹小学校、伊那商業に宿泊		4・1	沖縄戦開始（～6・23 死者21万人）
	11・21	伊那町美鷹村地籍に亘る軍需施設建設要員勤員に関する打合会（12・1～19・3・3の間に7200人の勤員を計画）		5・7	ドイツ降伏文書署名
1944	19	2・ 猪谷陸軍飛行学校伊那分教所開所（所長 山田少佐） 見習士官学生入校（第1回生）		6・5	中島飛行機工場稼働のため伊那第二飛行場建設に少なくとも1180人の朝鮮人來伊
	5・	少年航空兵58人入校（第2回生）		6・	この頃空襲にそなえ飛行場施設を六道の森等へ移転
	5・15	飛行場建設に学徒勤労奉仕はじまる		7・26	対日ボツダム宣言發表（7・30米蘇降伏勸告ビラ調査団谷に）
	6・	米軍サイパン島に上陸（7月東条内閣総辭職）		8・	エンジンを伊那中に分散整備
	8・	下士官学生入校（第3回生）		8・6	広島に原爆投下（この時点での死者14万人）
	9・	伊那飛行場完成（竣工祝賀大演習？）		8・8	ソ連 対日宣戦布告
	10・	米軍のレイテ島攻撃に神風特攻隊編成（21日出撃 27日爆撃）		8・9	長崎に原爆投下（死者7万人）
	11・	見習士官学生（特捜三期生）約50人入校（第4回生）		8・10	特捜三期出身の特攻隊員に出撃命令（出撃予定17日）於朝鮮
				8・13	日本、ボツダム宣言受諾を決定
				8・15	長野市等北信一帯米軍機による空襲（死者多数）
				9・25	終戦（陸軍伊那飛行場の在役3機？）
				10・	アメリカ軍來伊（10月～46年6月まで）
					アメリカ軍伊那飛行場接收（10月ころ）

参考文献 久保田 謙『伊那谷の青い空に』－高校生の違う陸軍伊那飛行場物語－ 銀河書房 1995刊  
十菱義武 菊地 実『戦争遺跡の事典』柏書房 2002刊

# 図 版



遺跡地を東側より眺む



遺跡地を西側より眺む



第1号トレンチ



第2号トレンチ



第3号トレンチ



第4号トレンチ



第5号トレンチ



第6号トレンチ



第7号トレンチ



第8号トレンチ



第9号トレンチ



第10号トレンチ



第11号トレンチ



第12号トレンチ



第13号トレンチ



第14号トレンチ



第15号トレンチ



第16号トレンチ



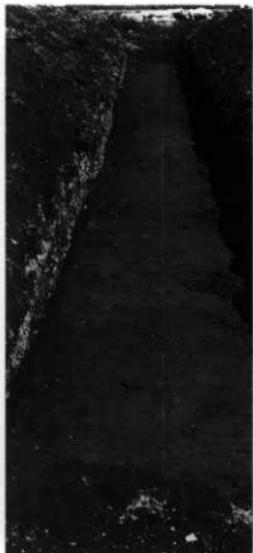
第17号トレンチ



第18号トレンチ



第19号トレンチ



第20号トレンチ



第21号トレンチ



防火用貯水槽 (掘る前の状態 (南側より))



防火用貯水槽（南側より）



防火用貯水槽の細部の組み方



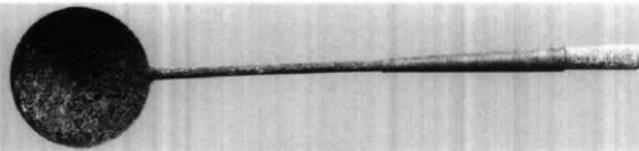
防火用貯水槽の壁面細部



第1号竪穴



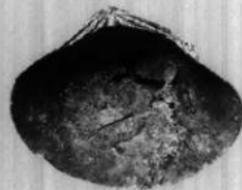
第2号竪穴



鉄製大型杓文字



鉄製プロペラ状工具



貝殻状皿



鉄製針金



鉄製釘



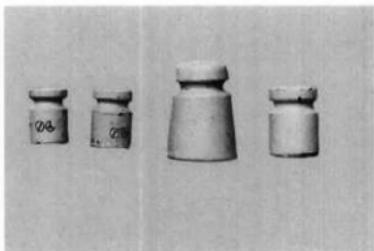
大型ボルト



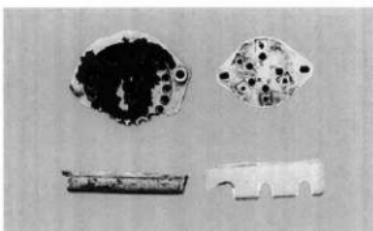
鉄製小刀



ガラス瓶類



碍子



モーガルソケット（上段）  
碍管（下段左） 安全器（下段右）



シーリングローゼット



碍子



革製パイプ締め



革製の軍靴

# 報告書抄録

ふりがな	おおはら							
書名	大原遺跡							
副書名	上の原保育所(仮称)の整備事業							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号	埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書							
編著者名	御子柴 泰正 飯塚政美							
編集機関	伊那市教育委員会							
所在地	〒396-8617 長野県伊那市大字伊那部3050番地 TEL0265-78-4111							
発行年月日	西暦2003年3月7日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ 一 ド	北 緯	東 經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
	市町村 遺跡番号	。	。	。				
おおはら 大原	ながのけん いなしひ 長野県 伊那市 おおあざ いなべ 大字 伊那部 うえのはら 上の原	伊那市	234		平成14年 9月10日 ～ 平成14年 10月31日	3,000	上の原保 育所(仮 称)の整 備事業	
所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項			
大原	集落址 戦争遺跡 (旧陸軍 伊那飛行 場跡)	縄文時代 弥生時代 昭和時代	防火用貯水槽 堅穴	1基 2基	縄文早・前期石器 縄文中期石器 太平洋戦争時の磁器 類 太平洋戦争時の金属 器類 太平洋戦争時の軍鞋 太平洋戦争時の電気 器具類	3,000m <sup>2</sup> に及ぶ広 い範囲の発掘調査で あった。太平洋戦争 時に構築された遺 構・遺物が検出され、 旧陸軍伊那飛行場跡 地の一端が垣間見ら れた。これは戦争遺 跡として大事に考 るべきである。 発掘調査の本命は 飛行場格納庫の発見 であったが、それと おぼしきものは発見 されなかつた。格納 庫の基礎の一部がか なりの長さで現存し ている。		

# 大原遺跡

埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

—上の原保育所(仮称)の整備事業—

平成15年3月5日 印刷

平成15年3月7日 発行

発行所 伊那市教育委員会

印刷所 伊那市 (株)小松総合印刷

